



# 人の育つ大学に

中川 真

生物学類第二十四期卒業生

## はじめに

私は、平成13年3月に生物学類を卒業し、現在、放送局に記者として勤めています。「大学で生物を勉強して記者に」と言うと、大学の関係者からも、マスコミの関係者からも驚かれることが度々あります。しかし、受験生として筑波大学生物学類を選んだ当時から現在の職を希望していた自分としては自然な成り行きでした。また現在においても、筑波での学生生活が今後の記者生活において大きな糧となるという思いを強くしています。筑波の生物学類を選んだのは間違っていない、と。社会人になってまだ二年目の私ではありますが、今回筑波フォーラムへの寄稿という貴重な機会をいただきましたので、筑波大学を選んだ経緯、学生生活で学んだことや、大学への意見などを述べさせていただくことにします。

## なぜ筑波大学か

受験生だった当時、私が大学を選択するにあたって、大きな二つの条件がありました。一つは、経済的な理由から、国立・公立の大学であること。もう一つは、「総合大学である」ということです。

はじめに述べた通り、生物の勉強をして記者になるという夢は、受験生の当時からあったものでした。現代において、科学技術とそれに関連するさまざまな問題は、社会のあり方を考える上で非常に重要なウェイトを占めています。エネルギー問題、航空機事故、脳死やバイオテクノロジー、技術と経済・産業…。これらのテーマをもっと良く知りたい、そして社会に訴えたいという思いがあったため、「大学できちんと専門的な考え方を身に付けたい」と考えました。特に生物・医学の分野に強い興味があったため、生物学の学べる学科を選んだのですが、同時に「理系の単科大学では、文系の友

人と交わる機会が少なく、視野が狭くなってしまふ」との考えもありました。

筑波大学には、人文科学・自然科学・社会科学、あるいは工学や医学といった幅広い分野の学類があり、多様な学生がいます。その意味で、私の希望に合致した大学でした。一年の浪人生活を経て、二度目の受験で念願かなって合格し、平砂の学生宿舎に入居して私の学生生活は始まりました。

### 「専門外」の重要性

専門的な知識や考え方を身に付けながら、常にそれらの社会との関わりを考えていたいと考えていた私にとって、筑波大学の履修システムは有難いものでした。一つは総合科目の設定です。総合科目は、学生が専門以外の学問にも触れるという意味で有意義である他に、自分の専攻する学問が社会の中でどんな意味を持つのかを考えるという点でも意義深いものだと思います。私も二つのうち一つは生物系の科目を履修しましたが、生物学の成果が実社会にどのように反映されているのか、社会全体の中でどんな位置付けをされているのかといった点を考える糧になったと思います。

もう一つは、他学類の授業を好きに受講でき、単位が取得できること。私は四

年生の、授業を比較的自由に組めるときに、文系の授業を積極的に取りました。心理学や人類学、哲学といった、人間の成り立ちやしぐみを文系の考え方で見る学問に触れる貴重な機会になりました。

### 生物学類での出会い

ちょっと変わった目的で生物学類に入った私でしたが、そんな「本筋でない」学生の考えや将来へのビジョンを、生物学類の先生方は思いの外理解してくださいました。特に、学類長も務められた小熊譲先生にはいろいろと声をかけていただき、たいへんお世話になりました。

小熊先生の授業で提出したレポートが、今でも手元にあります。進化についての専門書を一冊選んで、要約と自分の考えたことを書くレポートでした。ノーベル賞を受賞した著名な生物学者のジャック・モノーの『偶然と必然』という本を選び、四苦八苦しながら読みきりました。そのレポートの締め括りの一文です。

「現在の科学者は、ともしれば自然の中の真実を追究することのみに拘泥し、科学と、人間社会という主観性に満ちあふれた不合理な世界との主体的な関わりというものを考えていく努力を怠っては

いないだろうか。筆者が、一流のサイエンティストとして名の通った存在でありながら、このような多くの賛否両論が飛び交いそうな思想性のある本を記したことは、大いに意味のあることだと考えた」

一介の学生がずいぶん偉そうなことを書いたものだと、いま考えれば少々気恥ずかしい気もするレポートです。にも関わらず小熊先生はこのように講評をくださいました。

「この本はある意味では難解なのですが、貴君は本質（本筋）を見失うことなく読みきったと思います。最後の部分、賛成です。科学をする者として常に考えていなくてはならないですね」

このお言葉にたいへん勇気づけられたとともに、この本を読んだことで、自分が大学で生物学を学ぶ目的を改めて見つめなおすことができました。

ほかにも何人もの先生から助言を頂きました。専門外語の担任の先生に、卒業後の進路をどう考えているか聞かれ、マスコミを目指していることを話したときには、「新聞やテレビは、とにかく分かりやすいこと、役に立ちそうなことばかりを取り上げる。加えて、ほんとうに科学的な検証がきちんとなされていないこともしばしばだ。君がマスメディアの世

界を目指すというのなら、正しい知識や考え方を身につけ、正確な報道をしてほしい」。一線の科学者の厳しい目にも耐えられる報道を、という注文に気が引き締まりました。

また、四年次にはメイサー・ダリル先生の生命倫理学研究室に所属し、特に脳死と臓器移植や遺伝子治療といった問題について専門的な助言を頂きながら勉強する一方、先生の主宰する国際的な会議で発表をする貴重な機会も頂きました。先生のもとで、生命倫理の関わる分野の広さ、深さを思い知り、なおさら「これを研究者だけでなく一般の人に広く知ってもらうための機会はこれからますます重要になる」との思いを強くしたのを覚えています。

#### 学生生活で得たもの

さて、これだけ書くといかにも真面目に勉強して四年間を過ごしたように見えてしまいますが、実際はだいぶ学生生活を楽しんでしまったクチだったりします。ここからはそのことについて書きましょう。

私も筑波大学の学生として、ご多分に漏れず濃密な友人関係の四年間を過ごしました。その中で得た友人や、友人と共に悩んだり考えたりしたことは、学業の

面で得たことと同じくらい（あるいはそれ以上…？）大事なものだと思っています。学住近接、ほとんどの学生がごく近くで一人暮らしを送る中、時に毎日のように友人と酒を飲み、色々なことを語り合いました。将来のこと、恋愛のこと、文学、生き方…社会人となつたいま、毎日の仕事に追われてなかなか考えられない大きなテーマを、飽きもせず毎晩のように話しました。その中で得た友人はあらゆる意味で一生の友人と言える存在です。自分の思うことをさらけ出す一方で、彼らの考えを聞き、それを自分の中にまた取り込むことで自分なりに成長していったと思います。

人間が生物である以上、人間の行動や思考は最終的に科学で説明できると思っていた私にとって、ある友人の素朴な反論はいまもよく覚えています。「私は、人間の心の動きが電気信号や化学物質のやりとりで説明できるとはどうしても思えない」。人間学類の友人の言葉です。単科大学ではなく、あらゆる分野の学問を学ぶ学生がいる総合大学を選んだことは間違っていなかったと、端的に思った瞬間でした。

おわりに

少子化社会の本格的な到来や、産学連

携の社会的要請の前に、いま大学もそのあり方が問われています。それぞれの学校ごとの個性を明確に形成しなければ生き残れない時代に来ています。筑波大学は、研究と教育という二つの役割のうち、研究の領域に重点を置いた大学に変わっていく方向だと聞いています。

しかし、上に述べた私の経験から述べさせて頂ければ、学生が幅広い視野を身につける舞台としての性格を、決しておろそかにはしてほしくないとの思いを強くします。いろんな学生がいて、いろんな考え方があつて、学生も、教官も、職員の方も、その多様性に寛容であつてほしいと思います。ただの研究機関でなく、大袈裟に言えば学生が人間的に成長できる場所であつてくれれば、と思います。各分野に優秀な研究者が数多くいて、同時に学生どうしが膝をつき合わせて腹を割った付き合いができる。異なる分野の学生や研究者が交流できる。その貴重な環境を大事にさせていただくことで、人間的に大きくなった優秀な卒業生を社会の各分野に送り出すような大学であり続けてくれれば、卒業生としてこれにまさる喜びはありません。

（なかがわまこと 生命倫理学専攻）

